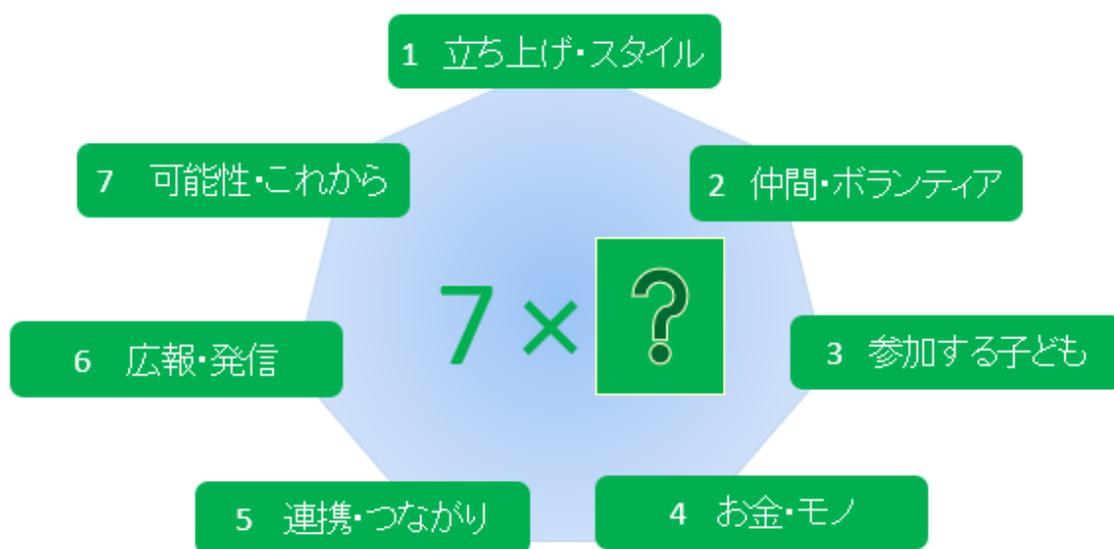


子どもの居場所づくりインタビュー調査報告

—子ども食堂等の活動の原動力と可能性を探る—



2023(令和5)年3月

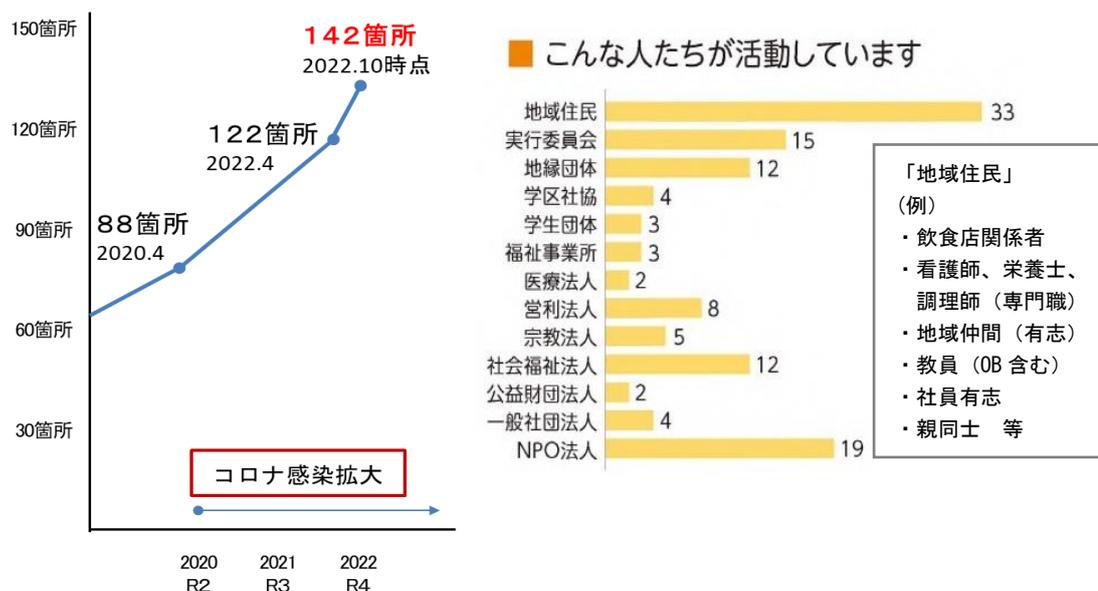
京都市社会福祉協議会 地域支援部

目次

はじめに	1
1 子どもの居場所づくりインタビュー調査	2
(1) 調査概要	2
(2) インタビュー質問項目(セブン・クエッション)	3
(3) インタビュー協力団体(市内14団体)	4
(4) 分析方法	4
2 調査結果	5
(1) 分析 -集めた情報ユニット(281)から見えてきたこと-	5
(2) 結論 -考察と発見-	8

はじめに

- 京都市内の子ども食堂や学びの場がコロナ禍にあっても増えています。この増加傾向は、近年、子どもの貧困や孤立を背景とした社会的関心の高まりによる地域福祉分野の大きな変化です。また、活動者（担い手）も多様であることも特徴のひとつです。



- 今回のインタビュー調査は、子ども食堂等の居場所がこれだけ増加していることに着目し、その活動者の原動力、運営の仕組み、さらには地域社会における可能性などを探ることにより、子どもが安心して暮らせる「場」について考察し、今後の発信・提言につなげることを目的に実施しました。
- 本調査では、まず活動者の「声」をきく、その人の言葉で返してもらったことから掘り下げることを大切にしました。その質問作成において、「これってどう?」「みんなはどう思っているのだろうか?」など、「問い」を多く集めることに時間をかけました。
- インタビューの分析結果から見えてきたことは多岐に及びますが、特に子ども食堂や学びの場には「多様性」と「包摂性」の要素が含まれた空間があることが見出されています。「多様性」と「包摂性」は地域共生社会のキーワードです。本会においても活動者の皆様と共に協働して地域共生社会の実現を目指し、これからも子どもが安心して暮らせる地域づくりを進めていきます。

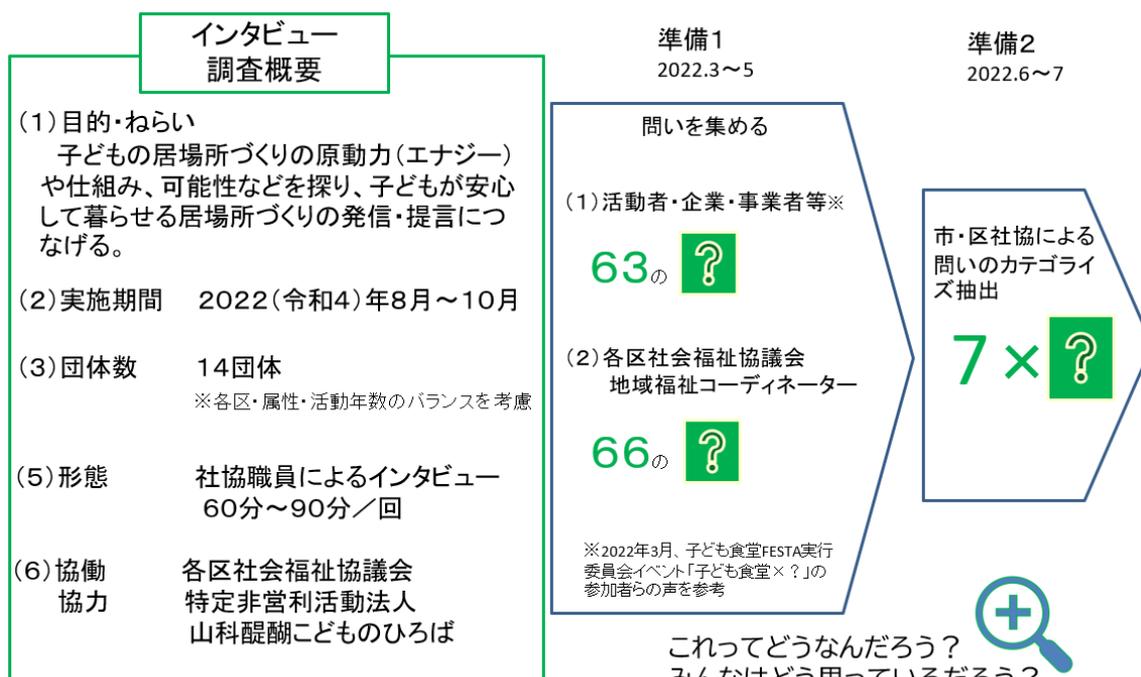
1 子どもの居場所づくりインタビュー調査

(1) 調査概要

- 京都市内では子ども食堂や学習支援の場としての子どもの居場所が、2022（令和4）年10月時点で142箇所あり、コロナ禍にあっても増加傾向です。本調査は、地域住民同士が触れ合う機会の減少、地域団体の高齢化、担い手不足等が大きな課題となる中で、子どもの居場所づくりの原動力や仕組み、地域社会における可能性などを探ることを目的に実施しました。

※なお、本会は「子どもの居場所づくり「支援の輪」サポート事業（京都市委託事業）」

- インタビュー調査の概要は下図のとおりです。調査は区社会福祉協議会の職員と協働し、特定非営利活動法人山科醍醐こどものひろばの協力のもとに進めました。まず、質問作成においては、活動者と子どもの居場所を応援する企業・事業者の方から63個、社協職員から66個の計129個の質問を集めて整理を行い、質問を7つに絞りました（「セブン・クエッション」と名付けました）。



(2) インタビュー質問項目（セブン・クエッション）

- インタビューの質問項目は次のとおりです。矢印（→）には質問から導き出したいねらいを記載しています。なお、質問内容は例示であり、質問者はその例示に沿って活動者へのインタビューを行いました。

① 立ち上げとスタイル → 地域福祉の多様化とその原動力を探る

「どんなきっかけや思いで始められましたか。その時の一番の苦労や楽しさ、うれしさ等があれば教えてください。「楽しそう、来たい雰囲気」はどのように作れるのでしょうか。」

② 仲間、ボランティア・スタッフ → 新たな活動者層と像を探る

「どのような方が、どのような形で参加されていますか。どんな雰囲気を大切にされていますか。継続してもらう工夫は何でしょう。」

③ 参加する子どものこと → 今の子どもとの「場」のあり方を探る

「子どもへの関わりで大切にされていることはありますか。子ども食堂に来た子どもたちの変化で印象に残っていること、その声があれば教えてください。」

④ お金・モノ（活動費・食材調達等） → 調達の仕組みの可能性を探る

「資金・食材はどのように集めていますか。難しいときはどのような対応と工夫をしていますか。応援している人とのつながりは？物価高騰の影響等で赤字になっていませんか。」

⑤ 連携・つながり → つながる要素、条件を探る

「どのような「応援団」がいるとよいですか。関連してこんな取り組みを一緒にしたいと思うことがあれば教えてください。」

⑥ 広報・発信 → 広報ツールの有効性を探る

「参加者は何を見られて来られていますか。発信面においてどんな工夫をされていますか。」

⑦ 子ども食堂の可能性とこれから → 目指す地域社会像を探る

「今後や将来に向けたこんなことをやってみたい。地域がこんなふうになってほしい等、自由に展望を教えてください。」

2 調査結果

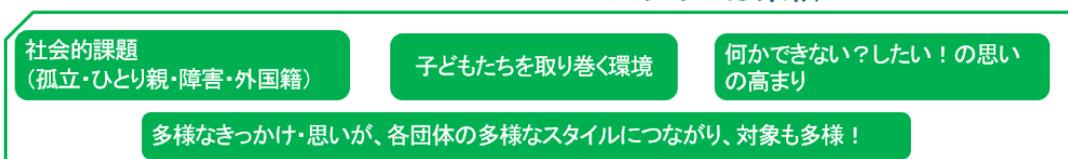
(1) 分析 –集めた情報ユニット(281)から見えてきたこと–

- 下図の緑枠線の中は、情報ユニットをカテゴリー化したものであり、そのカテゴリー化から見えてきたことを右上の矢印 (→) に記載しています。

① 立ち上げとスタイル

- 情報ユニット (42) による活動者の多様性とその原動力を探っています。傾向として、孤立、ひとり親、障害、外国籍など、生きづらさを抱える子どもや家庭を取り巻く環境に、「何かできない?したい!」思いがあり、外からの要請というよりは有志の発意が立ち上げにつながっています。
- また、活動者の原体験や他者のために「動く」「動かされる」という利他的な点が、原動力 (エネルギー) であることが見えてきました。子どもの居場所づくりに対する活動者の思いは多様であり、その多様性は活動のスタイルの柔軟性と関連しており、活動の魅力をもたらしていることが伺えました。

活動者の多様化と原動力を探る(42) → 活動者の原体験や利他性がエネルギー スタイルは柔軟



② 仲間、ボランティア・スタッフ

- 仲間 (スタッフ) のことから、新たな活動者層と像 (姿) を探ってみました。「それぞれができることを活かす」、「『ありがとう』という言葉が大事」、「スタッフも(が)楽しむ」などのキーワードがありました。
- エピソードとして、開設した食堂に不登校の子どもたちも来てくれて、そこで調理をしたり一緒にプログラムを考えたりとスタッフ的な役割を果たしているという「声」もありました。子どもの居場所づくりには、活動者を含めたみんなにとっての出番を創造し、「ほっと」できる居心地のよさがベースになっていることが見えてきました。

新たな活動者層と像を探る(45) → みんなにとっての居場所であり活躍の場 楽しさと「ほっと」がベース



③ 参加する子どものこと

- ②に関連して、参加する子どものことから子どもとの「場」のあり方を探ってみました。年代は小学生が中心ですが、若者、高齢者を含めた多世代や、しんどさを抱え「ちょっと気になる」子どもの参加もあります。「みんなの居場所」でありつつも、活動を続けることで子どもとの関係性が生まれ、支援を必要としている子どもの話をきくことができる「場」でもあることが見えてきました。
- また、大切な要素として「その場の自由度が高いこと」や、「子どもの目線に立つ」、「主体性・自発性をあたたかく見守る」といったキーワードが出ています。つまり、子どもの参加と子どもの話をきく場が大切にされ、大人と子どもの垂直なタテ関係だけでも友達同士のヨコ関係だけでなく、家庭や学校とは違う環境「サード・プレイス」の中で、ナナメの関係の要素が確認されました。

今の子どもとの「場」のあり方を探る(45) → **子どもの参加と子どもの話をきける場
ナナメの関係**



④ お金・モノ(活動費・食材調達費)

- 活動費や食材の調達の仕組みと可能性を探ったところ、苦労がある一方、草の根的に農家、八百屋、フードバンク、社協との出会いと広がりもあり、カンパ・バザー、クラウドファンディングの積極的な取組もありました。
- 地域の方が子ども食堂の開始前に野菜やお菓子をさりげなく持ってきてくれるというような、ひと昔前のお裾分けの姿もありました。もちろん、行政・企業・財団からの助成金も、継続可能な運営の助けとなっています。また、一連の調達のプロセスが、人と人、社会のつながりを生み出していることが分かりました。

調達の仕組みと可能性を探る(40) → **草の根的にお裾分けの土壌が生まれ、それが人と人、社会のつながるチカラに**



⑤ 連携・つながり

- 連携・つながる要素・条件を探っています。地道かつ丁寧に、地元への挨拶、報告会やイベントを通じて理解や共感を得る、学区の社会福祉協議会と民生児童委員と共催して応援してもらう、元々あったつながりを生かす、という実態が見えています。

子どもや親から相談を受けたときに、周りをつながりたいという声もあります。

- 一方で「つながれば良し」というわけでもなく、周りからの期待や需要が団体の対応力を超えてしまうことへの不安もありました。また、その地域で新しく活動を始める団体としての周りとの距離感に対して、社協をはじめ中間支援の期待も明らかになりました。

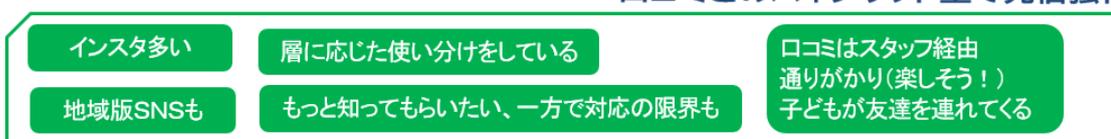
つながる要素・条件を探る(37) → 新参者(ヨソモノ)としての悩み
距離感と中間支援への期待



⑥ 広報・発信

- 広報・発信の現状からツールの有効性を探りました。SNSの活用が浸透している一方で、以前からのロコミも有効であり、ハイブリットが有効である現状が確認できました。

広報ツールの有効性を探る(35) → SNSの活用が浸透
ロコミとのハイブリッド型で発信強化



⑦ 子ども食堂の可能性とこれから

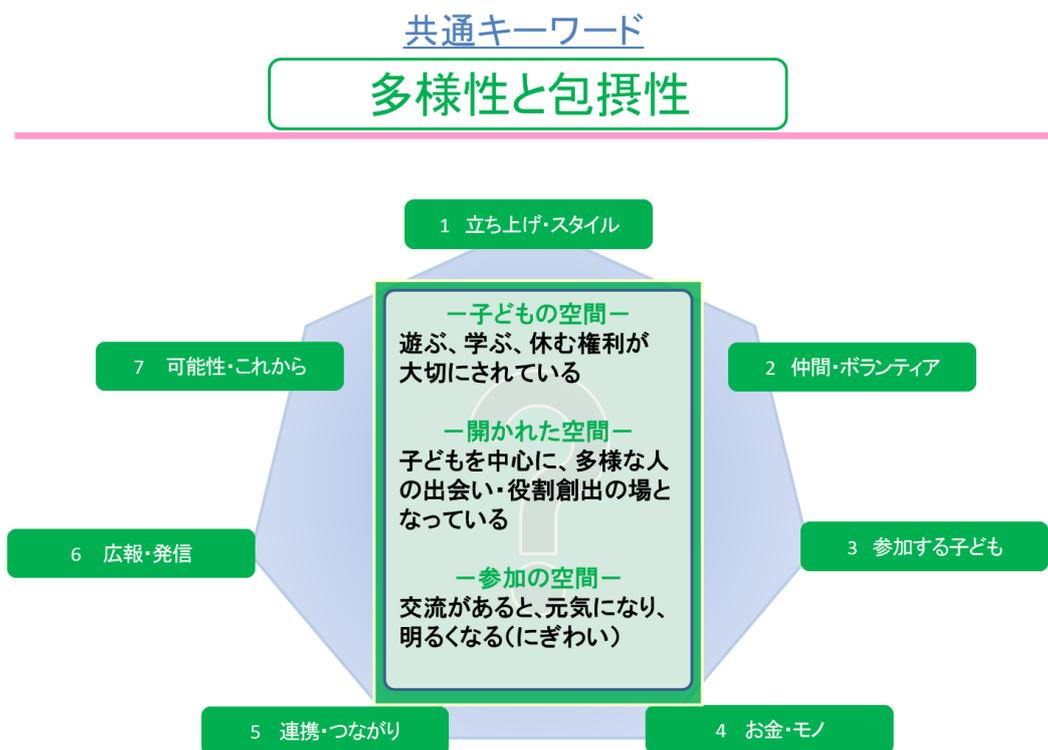
- 本項目は①の活動の原動力と共に着目した項目であり、目指す地域社会を探りました。いわゆる「ご飯が食べられない子どもがいくところ」というイメージではなく、子どもから大人、お年寄りまでいて、ボランティア・スタッフも含めた「みんなの居場所」を志向している団体が多いことがわかりました。
- また、子どもの居場所が地域にあることが当たり前となり、無理なく、こじんまりでも長く、そして必要な時に相談が出来る場への可能性が伺えました。さらに、私たち(活動者)が抱く地域への想いを子どもたちに感じ取ってもらいたいという「縦の循環への願い」もありました。
- 子どもの居場所とは、子どもに何かを与えたいことが契機となり、地域・社会の未来を子どもと共に創っていけるような場であることが見出されました。

目指す地域社会像を探る(37) → 子どもの居場所は、みんなの居場所
地域・社会の未来を子どもとともに



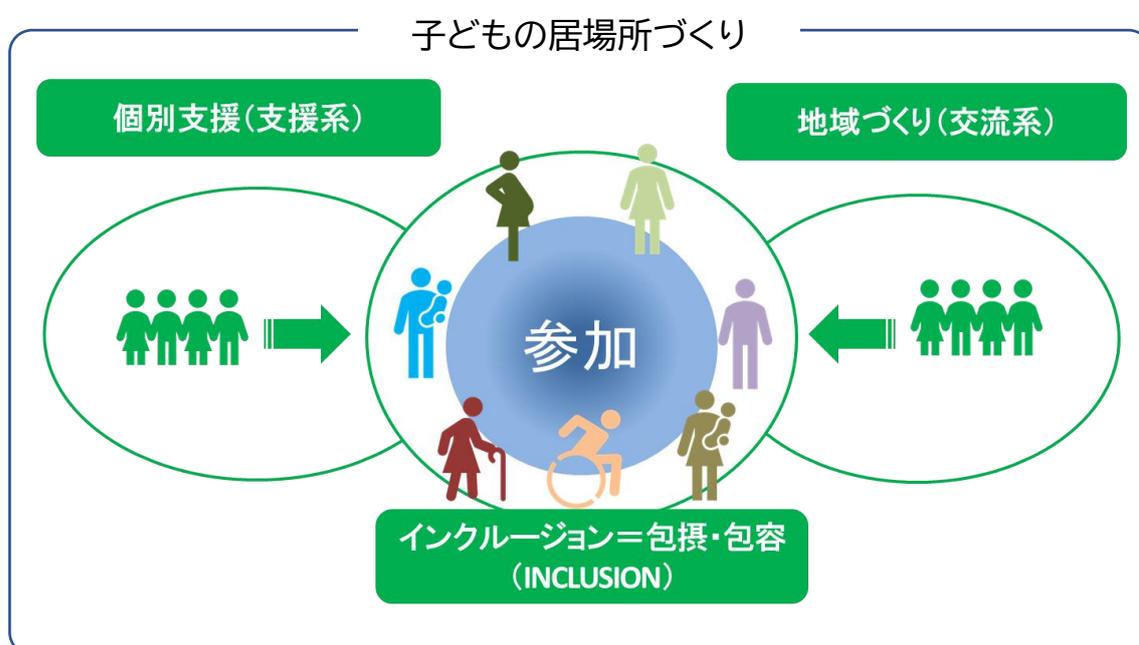
(2) 結論 –考察と発見–

- 7つの質問（セブン・クエッション）の分析から、「多様なきっかけ・思いが、各団体の多様なスタイルにつながり、対象も様々」「それぞれができることを活かす」「子どもからお年寄りまでいて、参加者・ボランティアの居場所」など、子どもの居場所づくりには、「多様性」や「包摂性」が共通のキーワードとして浮かび上がりました。疎外や排除ではなく、違いは違いとして認め合い、包み込んでいくようなインクルーシブな場が志向されているともいえます。
- その志向は、子どもの居場所の運営面に、次の3つの空間として活かされていることが考察されました。
 - ①遊ぶ、学ぶ、休む権利が大切にされる「子どもの空間」
 - ②子どもをまんなかに多様な人が出会い、役割が創出される「開かれた空間」
 - ③交流があると元気になる、にぎわいの「参加の空間」



- さらに、インタビューの対象団体から、個別支援を中心とする機能が強い場（支援系）と地域づくりから交流を中心とする機能が強い場（交流系）があることが分かりました。いずれの居場所も、子どもが安心して過ごせる「場」であり、全国こども食堂支援センター・むすびえ理事長の湯浅誠さんは、「困っている人をみんなで支える居場所と、みんなの中に困っている人を包み込む居場所」と表現し、すべての子どもにとっては地域の中に両方の居場所がひとつでも多くあることが大事」としています。
※2022（令和4）年11月19日「子どもの居場所づくりシンポジウム」講演より

- 以上から、今後も個別支援（支援系）と地域づくり（交流系）の要素のある場が地域の中に増えていくことが期待されるところです。小規模、少人数であっても多様なニーズに応えられる居場所があることは、子ども自身の存在を肯定される場に出会える選択肢と可能性が増えることを意味します。また、そのような多様な居場所は子ども・若者のみならず、地域住民にとっての参加の場を豊かにしていくと推察されます。
- そして、地域福祉の専門機関であり住民主体に基づく公私関係者の協議体としての市社協・区社協は、学区社協をはじめ行政、学校、児童館、企業などと協働して子どもの居場所づくりを支援する実践を積み重ねていくことが、これからの地域共生社会の実現に向けても大きな意味を持つと考えられます。



- さいごに、今回は活動者の声からの分析・発見に基づく調査報告でした。国では2022（令和4）年6月にこども基本法制が成立し、子どもの権利を保障し、誰一人取り残さず、すこやかな成長を後押しする社会を目指そうとしています。今後の検討課題として、子どもの居場所づくりの当事者である子どもの側から、子どもにとっての居場所づくりのあり方をきくことが大切であると考えます。

以上